文化財愛護
シンボルマーク
国指定史跡 琴似屯田兵村兵屋跡
史跡琴似屯田兵村兵屋跡
屯田兵の住まいに
ふれてみませんか
札幌市
札幌市教育委員会

琴似は、屯田兵発祥の地です。

1874（明治7）年、開拓使は、最初の入植地を琴似と決め、同年11月、兵屋208戸、週番所（中隊本部）、練兵場、授産所などを建設して兵村づくりを行い、さらにその翌年には、発寒に兵屋32戸を建てました。

屯田兵198人、その家族合わせて965人が、第一陣として入地したのは、1875（明治8）年5月でした。

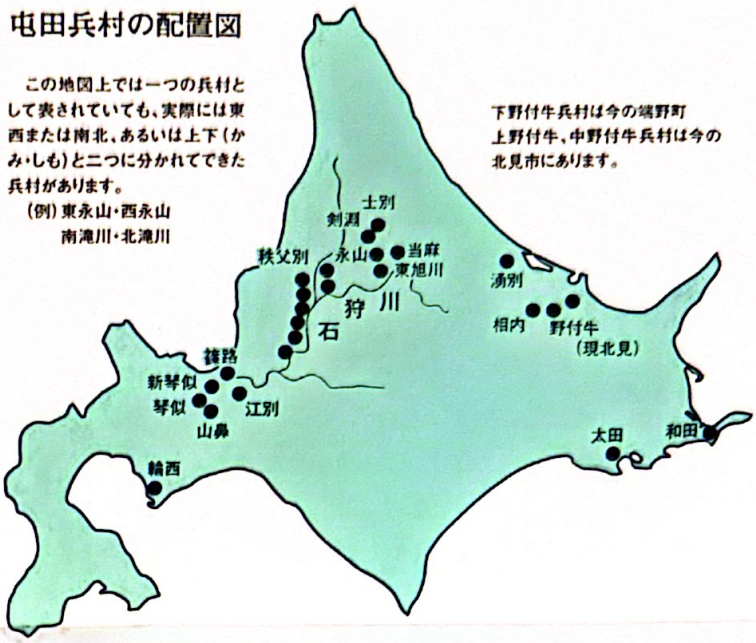
屯田兵たちは、既に入植していた人々と同じく、きびしい自然環境の中、慣れない手で開墾に当たりました。そして、大変な苦労の末に、原始林を次々と農地に作り変え、今日の西区のいしずえを築いたのです。

北海道には、最終的に37の屯田兵村ができ、総戸数7,371戸、家族を合わせて約4万人が入植しましたが、琴似はその最初であり、後の兵村づくりや実際の開拓に当たっては、琴似の経験が大いに生かされました。

屯田兵村の配置図

この地図上では一つの兵村として表されていても、実際には東西または南北、あるいは上下（かみ・しも）と二つに分かれてできた兵村があります。
（例）東永山・西永山
南滝川・北滝川

下野付牛兵村は今の端野町
上野付牛、中野付牛兵村は今の
北見市にあります。



琴似屯田兵村は第一中隊でした。

屯田兵とは、普段は開墾や耕作の作業をし、必要な時には兵士となって北海道を守るという、二つの役目を持った人たちです。

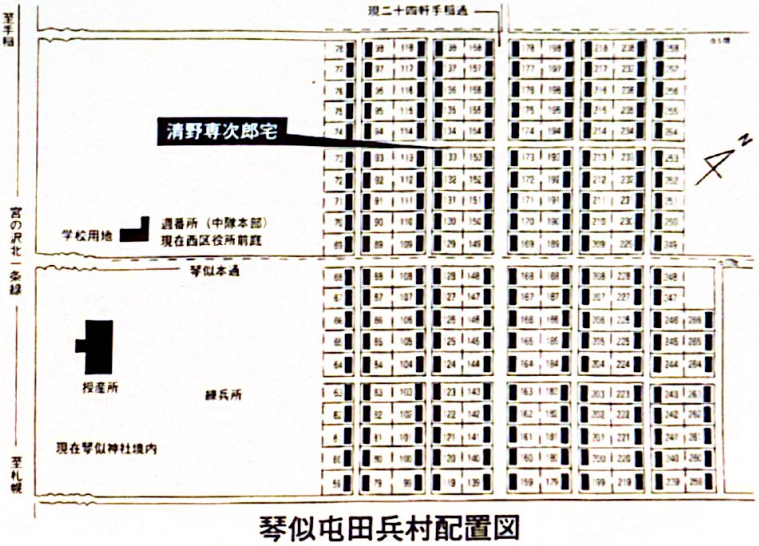
ですから、屯田兵は開墾作業だけではなく、軍隊に配属され、軍事訓練も受けました。

その軍隊の仕組みの一つである中隊は、200～240名くらいで組織され、普通は一つの兵村が一つの中隊になっていました。

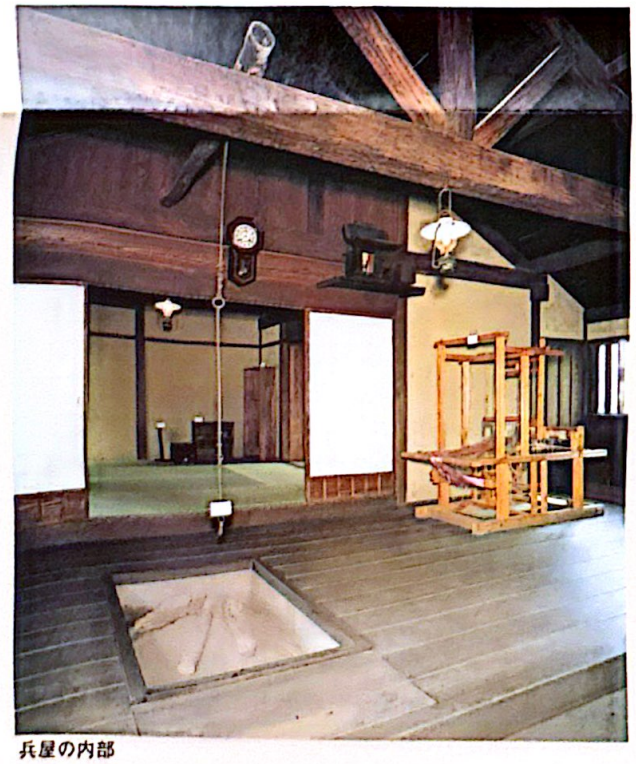
琴似兵村は、最初の第一中隊だったのです。

ちなみに、琴似入地の翌明治9年にできた山鼻兵村は、第二中隊でした。

琴似兵村は、右のような配置になっており、このように兵屋を集めて兵村をつくる方式を密集制または密居制といいました。



琴似屯田兵村配置図



兵屋の内部

屯田兵たちの暮らしぶりが見えてきます。

今の私たちから見れば、兵屋の内部は寒く、暗く、狭い造りですが、明治初期の住宅としては水準以上のものであり、当時の民家や一般開拓入植者の家に比べれば恵まれたものといえます。

開拓使の琴似屯田兵村づくりは、まず、屯田兵とその家族が住む家を建てることから始まりました。

それが「兵屋」です。原始の森に、こうした家がズラリと建ち並んだ様はきっと壮観だったことでしょう。

しかし、内部の高い天井には天井板がなく、小屋組みの太い梁がむき出しであり、その上、戸口や雨戸、障子越しに冷たい風が吹き込み、それだけでも寒々としたものでした。

また、暖房は『いろり』の火だけでしたから、家の中とはいっても、きびしい冬の寒さは、私たちの想像を超えるものだったでしょう。そんな中で、大人も子供もがんばり抜いたのです。

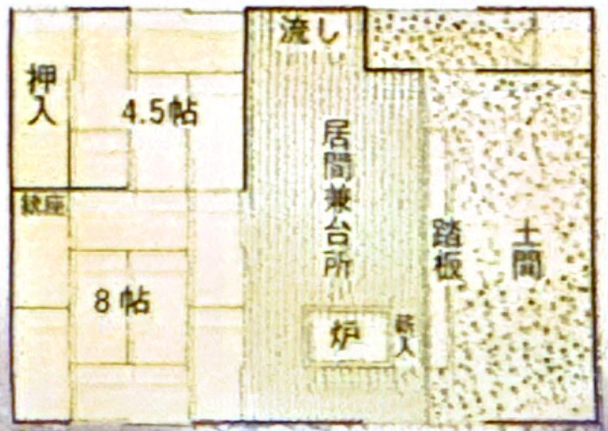
この建物は、1875(明治8)年の屯田兵入植時に、開拓使から宮城県宮理郡小堤村出身の清野専次郎に住宅として与えられた第133号の兵屋です。兵屋とは、屯田兵たちの住居で、一戸当たり150坪(約495㎡)の敷地に区画され、それぞれの区画に17坪半(約58㎡)の家が建てられました。

このような兵屋群や兵村の諸施設によって兵村が形成され、更にその周囲に、「開墾すべき土地」としてまず一戸当たり5千坪(約16,506㎡)の未開地が与えられたのが、当初の琴似屯田兵村でした。

清野家住宅だったこの建物は、何回かの増築、内部改造がなされ、1970(昭和45)年には、保存修理のため解体、1972(昭和47)年に復元されましたが、ほぼ最初に造られたままの姿で残っています。また、周囲の道路の区画も現在まで残っており、これらは当時の兵村、兵屋の様子を知る上でとても大切なものです。

きびしい自然環境の中、開拓と軍事訓練の日々をけんめいに生きた屯田兵と家族たちにとって、この兵屋が安らぎの場だったのでしょう。

『いろり』の側や、和室の畳に坐ってみると、当時の屯田兵の家族たちの会話が聞こえてくるようです。



屯田兵舎平面図

ご案内

●指定年月日	1982(昭和57)年5月7日 (国指定史跡)
●所在地	札幌市西区琴似2条5丁目
●電話	☎(011)621－1988(警備員詰所)
●交通手段	・地下鉄東西線「琴似」1番出口から徒歩3分 ・JRバス「地下鉄琴似駅前」下車 ・中央バス「地下鉄琴似駅前」下車
●休館日	年末年始(12月29日～1月3日)
●観覧時間	午前9時～午後4時
●観覧料	無料